

第610回

九州朝日放送番組審議会議事録

—— 平成31年2月度 ——

◇ 議題

<ラジオ番組>

「KBCふるさとWish」

<放送日時>

平成31年1月12日(土) 12時00分～13時00分

◇ その他

2019. 2. 18

九州朝日放送株式会社

第610回 番組審議会議事録

1. 開催年月日 平成31年2月18日(月)午後3時30分～4時55分

2. 開催場所 九州朝日放送 本社役員会議室

3. 委員の出席

委員総数 8名

出席委員数 7名

委員長	野田 幸之輔
副委員長	池田 勝
委員	戸田 康一郎
委員	守田 有理子
委員	赤木 由美
委員	鶴 利絵
委員	井手 雅春

放送事業者側出席者名

代表取締役社長	和 氣 靖
取締役	笹 栗 哲 朗
取締役 総合編成局長	森 君 夫
ラジオ局長	穴 井 建 一
報道局長	臼 井 賢一郎
地域共創ゼネラルプロデューサー 兼 社長室 地域戦略担当	大 迫 順 平
ラジオ局編成制作部長	渡 辺 浩 司
ラジオ局編成制作部 プロデューサー	佐 藤 雅 昭
番組審議会事務局長兼視聴者・広報室長	井 上 千 秋
番組審議会事務局 (視聴者・広報室)	松 永 俊 郎

4. 議 題

- (1) ラジオ番組「KBCふるさとW i s h」
　　<放送日時>平成31年1月12日(土)12時00分～13時00分
- (2) 平成31年2月・3月 ラジオ・テレビ番組編成状況の報告
- (3) 平成31年1月 視聴者・聴取者応答状況の報告
- (4) その他

5. 議事の概要

KBC60市町村情熱プロジェクト「ふるさとW i s h」

プロジェクトの狙い

- ◇ KBCのテレビ、ラジオをはじめ、KBCで働くすべての人たちが福岡全60市町村の声に耳を傾け、足を運び、地域と向き合います。
- ◇ 人や企業、団体をはじめ、農作物、フルーツなどなど福岡各地のキラリと光る情報に、KBCのテレビとラジオの各番組がスポットを当て60市町村を盛り上げていきます！

◎委員の意見（概要）

委員からは、

- 「ふるさとW i s h」自体は素晴らしい試みで、地方放送局として求められている役割に真正面から取り組む企画だと感心している。課題番組「KBCふるさとW i s h」は1週間で放送された内容を総括するものだが、この番組だけ聴いても十分に楽しめる内容だった。色々な人とのやり取りを通して久留米市の魅力を上手に伝える内容だったと思う。
- 番組の冒頭で地域の人口や産業、著名画家、アーティストの紹介が教科書的に紹介される構成には感心した。久留米市のことは知っていても、詳細な情報は知らない人も多いはずで、最初に概略を紹介するやり方は、リスナーにとって親切だと思った。久留米市にあまり関心がなかった人も番組に引き込まれたのではないかと思う。
- 川上政行さんの進行により会話が途切れることなく、あっという間に1時間の放送時間が経過した印象を受けた。改めて川上さんの素晴らしさやパワーに脱帽した。また、途中から出演したKBC沢田幸二アナウンサーとの息の合ったマシンガントークと同級生コンビの安定した掛け合いはラジオのならではと感じた。
- 自らも久留米で子育てを経験したD r e a m s FMのアナウンサー國分恵さんの話からは、久留米市の子育てのしやすさと生活環境のよさが伝わってきた。食については、「沖食堂」や「サーラ・カーナ」など久留米市を代表する有名店がしっかりと紹介されていた。上手に久留米市の魅力を伝える構成だったと思うし、性別や年代を問わず楽しめる内容だったと思う。

- 自治体が有する宝や魅力を自治体自体が気付いていないケースはよくある。番組やプロジェクトは、そこで暮らす人以外の視点、新しい地域振興のための視点を提供できる取り組みでもあり、地方自治体の未来を考える役割があるのではないかと思った。他方、変わりゆくメディア環境の中で、放送局の未来を考える企画にもなり得るのではないかと感じた。

などの評価を頂きました。

一方、気になる点や望むこととして、

- 番組でも紹介されたゲスト石橋凌さんの「久留米 YOKA MAP」から強い久留米愛を感じ取ることができただけに、1時間の放送時間ではあったが、もう少し石橋さんの話を聞きたいと思った。
- 「ふるさとWish」プロジェクト専用のホームページが開設されているが、その存在が十分に周知されていないように思う。地図と番組情報を連動させた専用サイト自体の仕組みを知らない人も多く、十分なPRを求めたいと思う。
- 慣れ親しんだ「ひまわり号」「ひまわりリポーター」から「アイタカー」「アイタガール」への名称変更違和感がある。確かに女性が担当しているものの、特にリポーターに「ガール」との言葉選びは違和感を抱いている。
- 今後、他の市町村を紹介するにあたり、久留米市と同じ切り口でその地域の魅力を伝えるのは難しいのではないか。小さな市町村ほど番組の力が試されるのではと感じた。

などの評価を頂きました。

これらに対して、担当者からは、

- 今後も他の市町村を紹介するにあたり「久留米市と同じ切り口で地域の魅力を伝えるのは難しいのではないか」とのご指摘について、実際に今回の久留米市では約48ネタ。対して、これまで最小のネタ数だった自治体では31ネタだった。どんな自治体でも30以上のネタは確保できると考えているし、足を運べばそれぞれの地域で頑張っている人、食、自然など様々なネタがあると確信している。
- プロジェクトのコンセプトや目的は失われがちなものであり、現場との打ち合わせを密に行い、番組をこなすだけが目的ではないこと、地域との関係を築き地域に光を当て、地域を活性化させることが本来のプロジェクトの目的であることを繰り返し共有するように心がけている。
- 「アイタカー」や「アイタガール」へと名称変更は約40年ぶりの決断だった。20～30代の現場の女性ディレクターや編成部員の意見も取り入れながら、若い世代に響くネーミングに変更した。

などの説明をしました。